シリーズ 障害者の就労事例 16

給食センターの星

KOTONONE
Series of Stories
vol.16

震災の直後から、炊き出しをはじめた気仙沼の給食センター。事業を再開したとき、はじめて障害者を雇用した。四年近くがたち、小松裕貴さんは、職場を支える戦力になろうとしている。

言葉を交わさなくても次の作業はわかっている

朝八時。宮城県気仙沼市の、一月の朝の冷え込みは厳しい。しかし、「いこま気仙沼給食センター」の作業場の扉を開けると、そこは熱気に満ちていた。七人ほどのスタッフが、せわしなく働いている。綺麗に磨かれたステンレスのテーブルの上には、ずらりとお弁当容器が並ぶ。マスク姿のスタッフが、なれた手つきで、おかずやご飯を盛り付ける。言葉が交わされることは、ほとんどない。みんな黙々と作業している。見ていると、一人がじっと同じ場所で作業し続ける、というのではなく、作業が終わったらこちらの持ち場に、次はこの作業、という具合に、次々と持ち場を替えていく。会話をせずとも、自分の段取り、相手の段取りは、すべて頭に入っている、体が覚えている、そんな雰囲気。ときおり「〇〇水産さん、あと〇個」と声がけがあると、現場にピリッとした緊張が走る。「いこま気仙沼給食センター」の代表取締役・生駒和彦さんは「しゃべってたら、とてもじゃないけど間に合わないのっさ」と笑う。長年いっしょに働いている仲間だからこその、息のあった作業ぶり。

彼にしかわからないゴミ収集車の音

よく見ていると、その中を、周囲より少しだけ背の高い男性が動きまわっている。小松裕貴さん。二〇一二年に市内の特別支援学校を卒業した小松さんには、知的障害がある。盛り付けが終わったお弁当を、発泡スチロールのケースに詰めたり、作業中に出てくるゴ

編集部=文
text by KOTONONE
河野 豊=写真
photograph by Yutaka Kohno